

肌に触れるその手の優しさ、 その存在に救われる



渡辺 えり
「劇作家・演出家・女優・歌手」

子どものころから病弱で、往診に来てくださるお医者さんや看護師さんの白衣、そしてアルコール消毒液のにおいを嗅ぐとホッとしてそれだけで具合がよくなるように感じたものだった。

そっとおなかに置く手、おでこに当てる柔らかな手、体温計を挟むために脇の下に触れる手。肌に触れるその手の優しさで、病でくすんだ心が回復していく。

母親が若いころに蓄膿症で手術を受けたことがあったというのでその体質を受け継いだためか、小学生のころからしょっちゅう耳鼻咽喉科に通っていた。抗生物質を飲んでもよくなり、学校の机の引き出しの中がチリ紙であふれていた。耳鼻咽喉科の先生も優しく、大好きだったが、看護師さんの1人におおらかで明るく大きな声の、そして少し太めの年

配の方がいて「えりちゃん、えりちゃん」とかわいがってくださり、その方がいると本当に安心だった。中学生のときに手術を受けることになったが、当時の手術は菌茎を切って、鼻の奥の膿を取り出し、また切った部分を縫って元に戻すという大手術だった。

子どもにとっては考えただけでも恐ろしく苦しい手術だった。しかも私の血管は細くもともと血圧も低い。さまざまな注射をするたびにどちらの腕もあざだらけ。そしてなぜか麻酔薬も効きにくかった。

そんな手術を耐えられたのは例の看護師さんの励ましのおかげだった。「えりちゃんなら大丈夫。すぐによくなるし、絶対に成功するから。絶対に大丈夫」と言って強く私の手を握ってくださった。手術の際も先生のそばで、最後まで私を励ましてくれた。